

松前町 福山城下町遺跡(B-02-029)

事業名：松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査委託

委託者：北海道渡島総合振興局

所在地：松前郡松前町字唐津 10-5・11-6・11-7・11-8・12・13-2・14-3・15-3・15-4・17-2・18-4・19-2・88-2・89-2・90-2・91-2・92-2・92-4

調査面積：854 m²

調査期間：令和5年7月3日～9月29日

調査員：中山昭大、山中文雄、菊池慈人

調査の概要

福山城下町は、松前藩の福山館(福山城)を中心に建設された近世城下町である。このうち、松前町字唐津、字松城、字福山の海岸沿いや河川沿いの低平地が、福山城下町遺跡として周知されている。

今回の発掘調査は、字唐津で実施される一般道道松前港線の改良工事に伴うものである。調査範囲は、町道唐津ヶ丘線との交差点西側から町道海岸通り4号線との交差点東側までの区間で、延長124mを測る。標高は7m前後で、唐津ヶ丘線との交差点から海岸までの距離は約90mである。国指定史跡の松前氏城跡福山城跡は、同交差点から北東へ約400m、標高約20mの海岸段丘に立地する。昨年度に調査した松前港線の歩道部分531 m²(A～E地区)に続き、今年度は同線の車道・歩道部分、町道唐津ヶ丘線の一部、町道海岸通り4号線の一部、合わせて854 m²(①～⑥地区)の調査を実施した。掘削深度は大部分が80 cmであるが、集水桝等の設置予定箇所は190 cmである。

字唐津の海岸部は、近世に唐津内町とよばれた町人地で、宝暦年間(1751～1763)に制作された『松前屏風』には、松前港線の前身である福山街道の両脇に町屋の立ち並ぶ様子が描かれている。昨年度の調



遺跡位置図

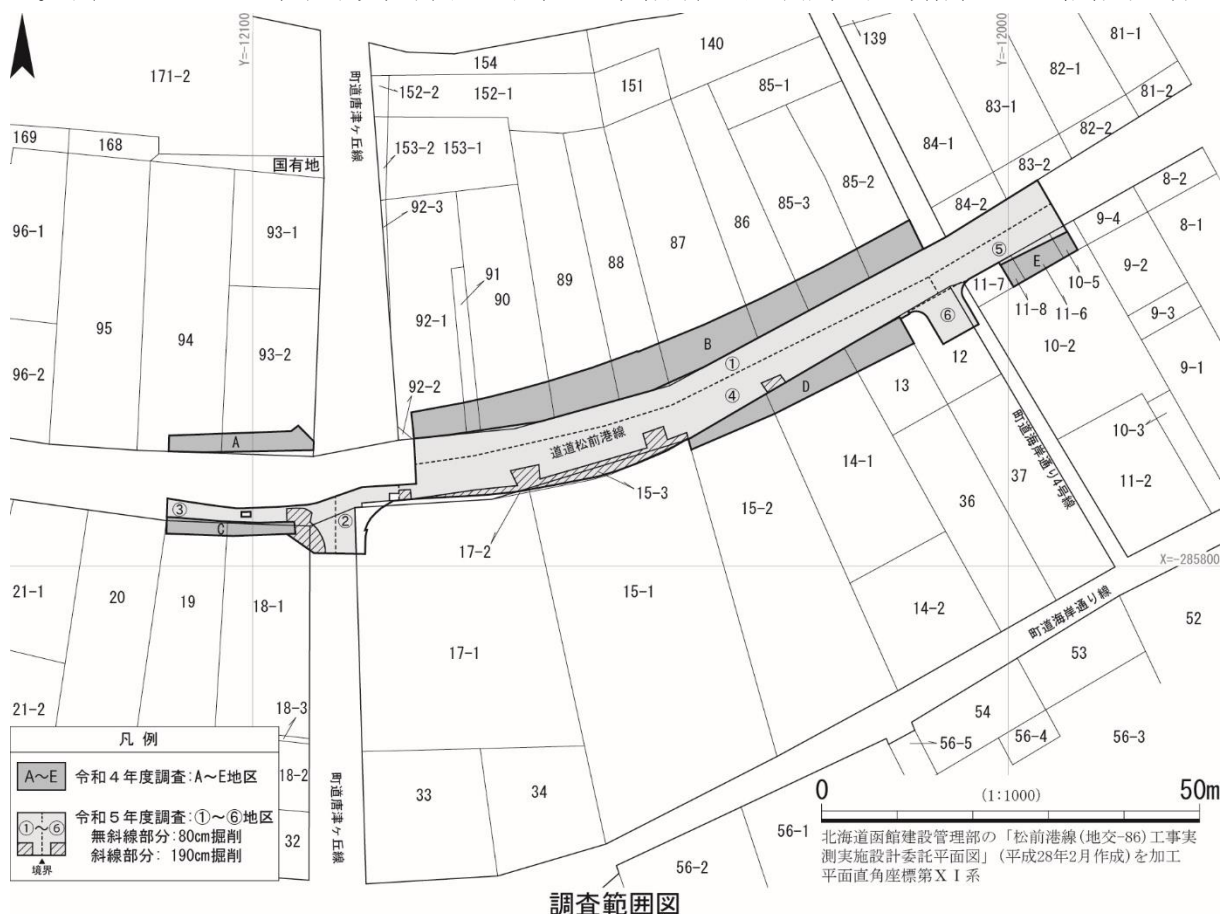
査では、建物の礎石、石積、炉、土坑等の遺構を約 50 か所検出し、陶磁器、金属製品、木製品、石製品、骨角製品、ガラス玉等の遺物が約 2 万 7,000 点出土した。主な成果として、沢状や凹地状の地形から得られた木製品を中心とする遺物、炉、轆轤口、埴埴、鉄滓といった金属製品の生産に関連する資料、まとめて出土した 16 世紀後葉の中国産磁器(漳州窯系)などが挙げられる。木製品は 16 世紀後半～17 世紀初頭のものともみられ、漆塗椀、曲物把手、桶側板、下駄等の和産物や、アイヌ文化に特徴的な板綴舟の舟敷、捧酒箸等が見られる。また、17 世紀代の炉から出土した埴埴には、金の微粒子が付着していた。

なお、松前港線改良工事に伴う福山城下町遺跡の発掘調査は、松前町教育委員会によって、平成 17～19 年度に字松城の旧小松前町、同 18・26 年度に字松城の旧大松前町、同 18 年度に字唐津の旧唐津内町、同 26 年度に字福山の旧枝ヶ崎町で実施されている。また、町道朝日豊岡線代行事業改良工事に伴い、同 22 年度に当センターが字福山の旧蔵町で調査を行った。このほか、弘前大学による学術目的調査が、同 29 年度に字豊岡の正行寺北側で、同 30 年度に字松城の旧小松前町で行われている。

遺構と遺物

松前港線の車道部分(①・④・⑤地区と②・③地区の北部)は、一部をのぞき深度 80 cm まで掘削した。アスファルト舗装の下は、路盤(碎石等)、路床(暗褐色土)によって構成されており、通信ケーブルや配水管が帯状に敷設されている部分もあった。路床の暗褐色土には近世の陶磁器等も含まれるが、近現代のガラス片も散見される。

同線の地番 14-1 地先にある 190 cm 掘削部分では、標高約 5m 以下に堆積する黒色土から、刀子の鞘、曲物、箸、杭等の木製品が出土した。この部分は、昨年度に舟敷等が出土した沢状地形の北西側にあたる。木製品のほかには、唐津焼、中国産磁器、小刀、骨角製の矢中柄、馬の頭骨、鯨の尾椎骨等が得ら

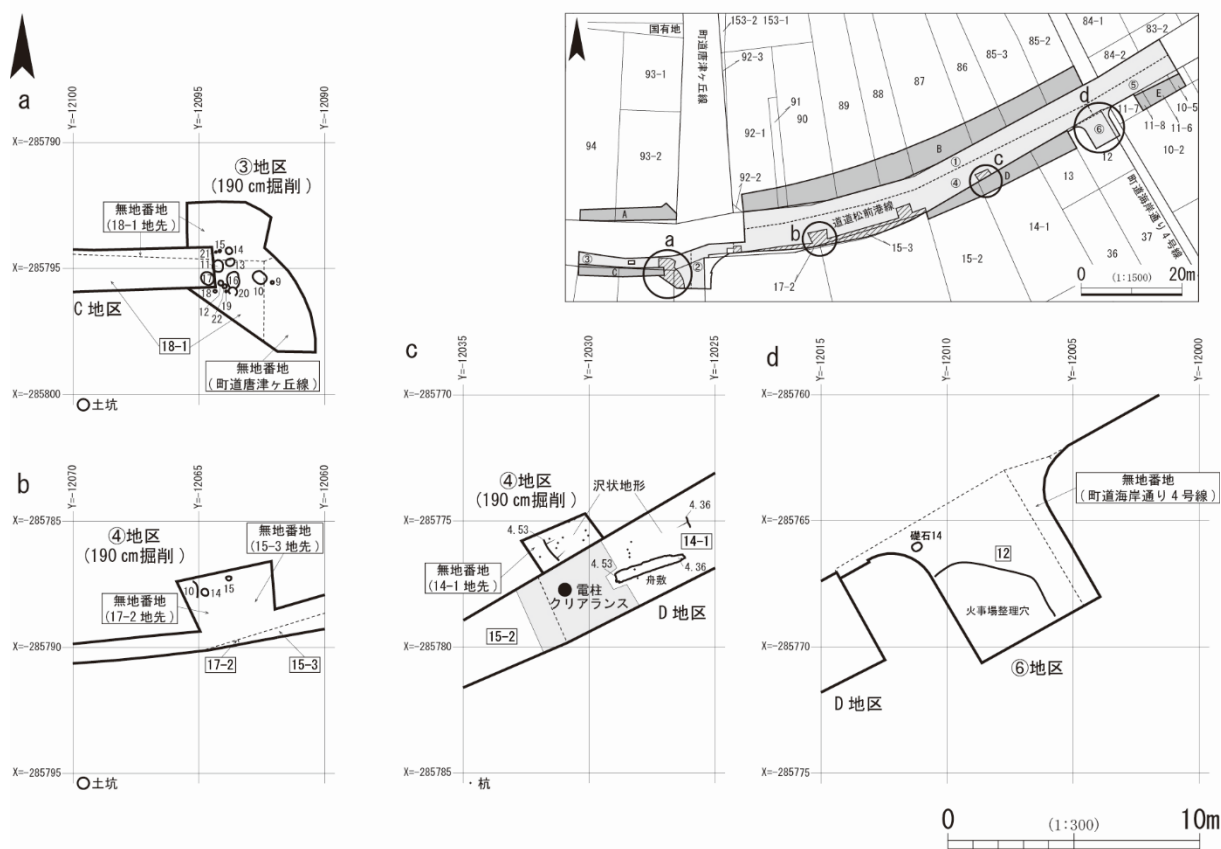


れている。また、地番 15-3・17-2 地先にある 190 cm 掘削部分では、旧福山街道の造成土や、かつての路面と考えられる黒色土を確認した。前者は標高 4.8m 付近を上面とする自然堆積層の上にいる。礫を多量に含み、厚さ 30～40 cm を測る。後者は標高 5.2m と 5.5m 付近に見られる 2 枚の黒色土で、厚さは 10 cm 未満である。このほか地番 17-2 地先等で、街道造成以前の土坑 3 基を検出した。

唐津ヶ丘線の 80 cm 掘削部分(②地区の南部)では、標高 5.2m 付近に広がる焼土粒や炭の混じる土層から、陶磁器、寛永通宝等が出土している。同線と松前港線との交差点南西側にある 190 cm 掘削部分(③地区の主に南東部)では、地番 18-1 を中心に土坑 15 基を検出した。土坑には長径 50～60 cm の楕円形や、長径 20 cm 以下の柱穴状・杭状のものなどがあり、覆土から珠洲焼の破片が出土している。

海岸通り 4 号線の地番 12(⑥地区)では、黄褐色ローム層の上下で火災の痕跡を検出した。ローム層は上面の標高が 5.6～5.8m で、厚さは約 10 cm を測る。同層の直下では、直径 5m を超える掘込から陶磁器、瓦、金属製品、石製品、礫等が大量に得られている。遺物の多くが焼けていることから、この掘込は火事場整理の穴であろう。穴の南～西部は調査範囲外にのびる。掘削時期は出土した陶磁器等から 19 世紀後半と推測される。なお、海岸通り 4 号線部分は掘削深度が 80 cm であるため、調査は穴の上面付近にとどまる。

今年度の調査で出土した遺物は、陶磁器・土器・土陶磁製品約 8,000 点、金属(鉄・非鉄)製品約 40 点、木製品約 400 点、石製品 5 点、骨角製品約 10 点、ガラス玉 2 点等を数える。陶磁器は肥前系を中心に、瀬戸・美濃系、中国産磁器等、土器は少数であるが擦文土器が主体で、土陶磁製品は瓦、轆羽口、土人形等がある。鉄製品は小刀、鉄鍋、釘等、非鉄製品は寛永通宝、煙管等、石製品は石臼、硯等、ガラス玉は青色の小玉で、木製品・骨角製品は上述したとおりである。



遺構分布図



調査状況（地番 14-1 地先） 東から



80cm 掘削状況（地番 15-2 地先） 北西から



馬頭骨出土状況（地番 14-1 地先） 東から



杭出土状況（地番 14-1 地先） 南西から



旧福山街道土層断面（地番 15-3 地先） 東から



土坑群確認状況（地番 18-1） 南から



ローム層検出状況（地番 12） 北東から